



# IV-JAPAN

NEWS 【NO.6】 2005.10.15 発行

## シェンクアーン県 米銀行・家畜銀行事業



前号の IVNEWS のシェンクアーン事業の中で「米銀行、家畜銀行」と小さく触れましたが、「米銀行、家畜銀行って何?」「どのように運営するの?」と疑問に思われた方が多いと思います。そこで、事業の目的や仕組み等を説明します。

### 1. 《米銀行》

**目的:** 米銀行はその名の通り、米を現物に取引します。村に米銀行が設立されることにより、低利で米を借りることが出来、食糧確保に繋がります。米銀行が村に無かった時は、米の高利貸し業者から 50%~100%の利子で米を借り、返済するために、外に賃労働に出かけ、村民自身の田んぼや畑に従事する時間が減少し、農作物や米の収穫量に影響するという悪循環でした。村の米銀行の設立は、村民が安心して借りることが出来、外に賃労働に出かける必要がなくなるため、畑や田んぼはもちろん、家族と過ごす時間も増えます。

**仕組み:** (1) 米銀行の会員を募る。(2) 米銀行の会員が拋出する米の量を村民の話し合いの下に決定する。(3) 米銀行の会員の利子、及び非会員の利子や米の返済期間、利子の使い道(米銀行の貯蓄、学校の教材費等)米銀行の規定を決定する。(4) 村民の寄付で米倉を建設後、会員が拋出した米と当会からの米 6 トンを元米として米倉に入れる。(5) 多くの村民の備蓄米が底をつく 8 月頃米を貸出す。米の収穫後利子を付けて米銀行に返済。利子の分米倉の米が増える。事業開始から 2~3 年後に利子はさまざまな目的に使用されます。

### 米銀行規定 (対象村 3ヶ村の内 2カ村)

	サン村	タムサイ村
米銀行会員世帯数	68 世帯	30 世帯
会員の米の拋出量	20 キロ	20 キロ
会員利子	20%	15%
非会員利子	30%	20%
当会への米の返済期間	5 年間	5 年間

### 利子の使い道

利子の使い道	サン村	タムサイ村
米銀行の貯蓄	70%	40%
子どもの教育費	15%	40%
米銀行実行委員会運営費	10%	10%
村の運営費	5%	10%

【写真左：米を米倉に入れる村民 (タムサイ村) 写真右：鶏舎飼育を実践する村民】



### 2. 《家畜銀行》

**目的:** 家畜銀行は、資金不足で家畜を買うお金がない村民に家畜(豚、鶏)を期限を付けて貸出し、村民は家畜を繁殖させ、親の家畜を銀行に返済し、繁殖した家畜の子をキープし、家畜業での収入源の確立を目的とします。また、返済された家畜は、新しい村民に貸出されるため、借り

た村民は責任を持って健康に飼育しなければならず、村民同士の協力がこの事業成功の鍵といえます。

**仕組み:** (1) 家畜銀行実行委員会を村に設立(2) 事業参加世帯を募る。 ※参加世帯の条件として家畜飼料を用意出来、また現在家畜を所有していないこと。また家畜飼育訓練に

参加し、専門家が奨励した鶏舎飼育を実践し、及び飼料を用意できること。(3) 実行員会と契約後、家畜を参加世帯に貸出す。(4) 1 年間で家畜を繁殖させ、家畜の親を実行委員会に返済、家畜の子を村民がキープし、返済された家畜を新たな村民に貸出す。

## 第8回日本文化紹介 “KNOW JAPAN” (東芝国際交流財団助成)

5月22日東芝国際交流財団の支援で日本文化紹介の一環として着物ファッションショーを開催しました。36人のモデルがさまざまな種類の着物を着て、またスタディー・ツアー参加者が着物の着付け、タイ資生堂がメイクアップ、職業訓練理美容コースの卒業生が髪セットアップを担当し、ボランティアの昼食は調理コースの生徒が担当、それぞれ大活躍しました。ファ

ッションショーの他にも、茶道や、日本舞踊を披露し、スタディーツアーの参加者が大活躍しました。また、去年の日本公演で招聘した歌手のセンさんも日本の歌を披露しました。このショーは英字紙のヴィエンチャンタイムスやフランス語新聞のリノベーターにも取り上げられ、たくさんのラオス人に日本の文化について知ってもらった良い機会となりました。



五歳と三歳と両親のモデルは宮城医師一家



モデルのメイクとヘアは美容コースの生徒が担当



出番を待つモデル



JICA シニアボランティアの藤田さん  
による打掛着付と日本髪

### ～在日ラオス大使夫人から IV-JAPAN への手紙～ シボン ケオラ 女史より



私は、IV-JAAPN がさまざまな活動をし、ラオスの人々に大変役立っているのをうれしく思います。IV-JAPAN のラオスに対する貢献は、社会開発面だけでなく、文化面においてもです。IV-JAPAN が毎年ラオス文化を日本で紹介したりしているお陰で、ラオスが日本で広く知られてきていると思います。日本の3年間の滞在期

間中、私も日本の各地でさまざまなラオスの文化活動を行いました（もっとやりたかったです）。NHK 放送博物館で行った私の文化活動の写真をお送りします。この活動はラオスをアピールする良い機会となりました。今後もラオスのために宜しくお願ひします。



## 【タイのプロジェクト報告】 ブーヤイ村縫製訓練センターが村民織物センターに変わりました

東北タイのスリン県ムアンケー村、ノンムアン村とブーヤイ村 3カ村に縫製職業訓練所を 1997 年に開所しました。当時の東北タイは非常に貧しく、村人は都会のバンコクやサトウキビ労働者としてミャンマー国境のカンチャナブリまで出稼ぎに行くのが普通になっていました。当会がターゲットにしていたスリン県の 5カ村からも、遠く日本や台湾に出稼ぎに行く人もいました。遠くまで出稼ぎに行かなくても、自分たちの村で家族と一緒に生活しながら収入を得たいというのが村民の願いでした。それで I V - JAPAN では 3カ村の女性を対象に希望の多かった縫製の職業訓練をスタートしました。

ムアンケー村ではお寺のご好意で、寺の集会所の 2 階にセンターを設けたため、1 年が経つ頃、村民からミシンの音がうるさいという苦情が出され、また、運悪く縫製センターのリーダーだった住職の姪が亡くなったため閉鎖され、ノンムアン村のセンターと合体しました。ノンムアン村のセンターは当会のコーディネーターが常駐していたため、運営も皆で役員を決め、縫製企業からもオーダーが取れ、順調に進んでいました。おりしも、1 村 1

品政策が始まり、ノンムアン村では縫製を取り上げ、そのおかげでトレーナーの派遣が実現し、技術アップに努めました。現在同センターの抱える問題は世代交代で経験の浅い村民の技術力アップです。また、田植えと収穫期の 5 ヶ月間は農業に専念し、センターは休業になるために、継続オーダーがもらえないことです。話し合いの結果、新しいトレーナーを得て、技術を磨き、1 年間縫製に専念してオーダーを取りやすくし、収入を上げることになりました。

ブーヤイ村では村長が自宅の地所を提供してセンターを建設したため、縫製企業のオーダーも村長が一所懸命受注に走り、順調に動いていました。

私は毎年、スリンを訪れ、村民との話し合いをして事業を推進してきましたが、プロジェクトも 10 年近く経つと、村民も年を取り、老眼鏡がないと仕事ができないような状況になり、また、タイ国自身東南アジアでは豊かになりつつあり、村の環境もずいぶん変わりました。

1990 年から当会はスリンでターゲットの 5カ村の教育環境改善のために奨学金支給を手始めに、全村民の家にトイレを設置したり、診療所

の設置等、衛生環境改善プロジェクト等を進め、最後の事業として、村民の経済的自立を目指し、縫製センターを設立したわけです。

10 月 8 日にブーヤイ村を訪れ、村民の希望により、これからは伝統技術の「織物」を女性の経済活動にするために、村のセンターをハンドオーバーしました。スリンは有名なカスリの手織物の産地です。近年タイやラオスでは伝統の絹織物が見直され、若い人たちも結婚式などには好んで手織りの絹の服を着ます。また、1 昨年バンコクで開催された A P E C の際、各国の代表がスリン産の絹布のシャツを着たことから、スリンが有名になりました。そんな影響もあり、ブーヤイ村では 1 着縫っても 10 バーツ (約 30 円) くらいにしかならない縫製より、手織物を選びました。村の女性は皆織物が好きです。私も彼女らの決断に大賛成です。

ノンムアン村は新しいトレーナーを迎え、もう少し技術をアップして、縫製を続ける結論に達しました。来年どんな結果が出るのか、8 月訪問を約束してスリンを辞しました。ラオスからはいつも車で行きますが片道約 7 時間かかります。富永記



ブーヤイ村センターの受け渡し式  
今後は村の織物センターに生まれ変わる  
地区委員会が積極的に資金を支援



ノンムアン村の縫製センター  
1 着約 30 円の手間賃の子供服と  
60 円の学校体育着が主な仕事

## 聴覚障害者職業訓練

(共催：IV-JAPAN、HANDICAP・INTERNATIONAL・FRANCE、障害者協会)

6月13日～8月5日までIV-JAPAN、ハンディキャップ・インターナショナル・フランス、障害者協会が共催して、聴覚障害者のための職業訓練縫製の基礎コースを実施しました。11人の訓練生が受講し、修了証書を受け取りました。内3人の訓練生

が小学校を卒業しておらず、識字教育を受けていないため、訓練では教科書を使用したり、計算等が必要となるため、苦勞していました。この訓練のトレーナーは先のトレーナー養成ワークショップの訓練を受講した当会の卒業生で、トレーナー

は自ら進んで手話の講習を受け、手話でコミュニケーションを取ることが出来たため、スムーズに運ばれました。この訓練が、障害者の社会進出の促進を促し、何より訓練生の経済的自立への一歩を踏み出すきっかけとなることを期待します。



終了式で手話でこれからの抱負を述べる卒業生



トレーナーと訓練生

## ヴィエンチャン職業訓練

4月25日～6月10日まで、ヴィエンチャン職業訓練(調理、理美容、縫製)の初級コースを実施しました。当会の職業訓練は口コミで宣伝され、沢山の応募があります。全ての訓練応募者を受け入れることが出来ないため、面接を行い、訓練生を選考します。面接では、訓練希望者の生活状況、教育、訓練を受けた後の目標等を尋ね、貧しく、やる気のある人に訓練を受けるチャンスを与えます。今回の面接で調理コースの応募者数55名中24名、理美容コース59名中23名、縫製コース35人中12人が訓練生に選ばれました。この訓練では、トレーナー養成ワークショップを講習した当会の訓練生が、アシスタントトレーナーとして大活躍し、大変な成長を遂げていることが分かりました。また、理美容コースでは、タイ資生堂からの協力を得て、昨年の職業訓練と同じタイ人専門家を招聘しました。



調刻した果実を手に記念写真

### カノック奨学金ドナー (4月1日～10月13日まで) 順不同

松田知、島慶子、戸田昌子、佐藤美津子(6口)、福永文代、片桐鈴子、石黒進(2口)、廣田康伸、小林明子、川村みつ子、大山郁子(ウイメンズめぐろ)、安村美智子、泉久子、菅原由紀、中村江里子(2口)、岩村和之、田中えい子(3口)、武川貴美子、岡庭史子(2口)、國吉裕子、斉藤加代(3口)、菊池浩子、井上貴美子、町田裕、伊波美智子(2口)、

### 運営費、寄付金 (4月1日～10月13日まで) 順不同

(一万円以下は省略させていただきます)

川村みつ子 10,000円、宇野薫 10,000円、泉久子 38,000円、田部井功 30,000円、斉藤加代 50,000円、今野豊 30,000円、大田栄次 179,000円、倫理研究所 100,000円、東京ウィルライオンズクラブ 100,000円  
ありがとうございました。



## 幸子のラオス便り No. 12 「交通事故に遭って」(2005年9月15日)

～ラオスでは交通事故を見ない日はないくらい事故が多い。特 5月から 10月にかけての雨季は、道路の穴に水がたまり、穴と知らずにバイクが突っ込み、転んで怪我をしたり、後続の車にひかれたり、道路事情の悪さ、また、肝心の交通法規も整備されていない。運転者の 6割は無免許といわれ、交通規則もよく知らない人が運転しているという事情もある。昨年 11月のアセアンサミット議長国としての威信を懸けて、ヴィエンチャンの町の整備が行われ、道路事情も随分とよくなって、信号も増えたが、位置が悪く見づらい。街灯も殆どなく、夜は暗く運転しづらい。そんな中での事故だった。～

\* \* \* \*

思わぬことが起こるものですね。8月 28日、日曜日、午後 7時、日課になっていた 1時間のウォーキングにネパール人の友人と一緒に家を出て、ここからは友人の話で分かったこと、私の記憶はありません。多分 7時半ごろ、ジャンボ・ツクツク(タクシー) 2台が追い越しを始めて、私の左腕に後ろからぶつかって、私は半回転して、後ろに倒れ、脳震盪を起こしたようです。後頭部が切れ、血がたくさん出て、友人はびっくり、それでもとっさに頭を動かしてはいけないと、胸に抱き、今度は息をしていないので、一生懸命胸を叩いたそうです。そのうち、私の口から息が漏れ、ほっとして、ようやく彼女の日本人の夫に電話し、運良く、3回目につながり、ご主人

から大使館の医務官にこれも運良く連絡が取れて、皆が駆けつけてくれました。医務官がタイのノンカイの病院にラオス側国境まで救急車を待機させ、友人と領事が私の家に行き、パスポートと保険証を探してくれて、友人は着替えまで用意して、皆で国境へ運んでくれました。近所のラオス人は関わりたくなく、出てこなかったそうですが、マットレスや、タオル、水等差出してくれたそうです。事務所の日本人職員から夜中にもかかわらず、日本の副代表と家族に第 1報が伝えられました。89歳の母が動転したのではと危惧しましたが、翌々日の私からの電話で安心しました。ノンカイの病院の集中治療室ですぐ後頭部を 5針縫い、私が気がついたのは手術後の 29日午前 2時ごろです。有難いことに医務官も領事も付き添っていて、脳や内臓検査で異常がないのを確認し、左腕の折れた 2ヶ所の手術は午後 4時と決まり、国境が開門する午前 6時まで、車の中で仮眠したようです。保険の手続きも済ませてくれていて、9月 5日の退院には約 70万円余の入院費用は保険でカバーされ、助かりました。10月 4日にはギブスを外せることになっています。幸いに、右手も両足も使えますし、タイ人の外科医がおっしゃるには、骨は年よりもずいぶん若いので回復は早いだろう、コレステロールも正常なので、気にせず、毎日卵の黄身を 2個食べ、栄養を良く取るようにとのアドバイスでした。昨年からようやく 5キロのダイエット

トをしたところでした。タイのガールスカウト連盟はじめ、チェンマイからも友人が見舞いに駆けつけてくれて、流通科学大の上田先生も学生と国境を越えてお見舞いに来てくれました。9月 5日にラオスに戻り、7日には心配しているラオス人職員、ワークキャンプに参加している日本人学生 8名とお世話になった皆様をお呼びして、事務所で生還祝いのバーシーの儀式をしました。今、また生かされたことに感謝しています。30年前のお産のときに血圧が 260になり、一度死に掛け、今回で 2度目の生還です。初期処置が良かったこと、幸運が重なり、命拾いをしました。皆様本当にありがとう。たくさんのお見舞メールもありがとうございました。

\* \* \* \*

ネパール人の友人は日本の大使館員のチームワークの素晴らしさに感心していました。医務官は 10年前にもワークキャンプの学生 5人が Dengue 熱に掛かり、入院したチェンマイ大学病院でお世話になった、琉球大学病院の宮城啓医師です。今までにこんな熱心で、素晴らしいお医者さんを見たことはありません。それ以来、タイの無医村に行ったり、JICA 専門家でラオスに赴任なさったときには再会し、また、大使館勤務で今回はご家族を伴っての赴任です。ご縁があるのですね。大使館の皆様、本当にお世話になりました。

### サポート会員からのお便りコーナー

いきなりのメール申し訳ありません。私は高校生のころタイのワークキャンプに参加したものです。今はいい大人です。現在は奨学金のドナーにはなっているものの、自分のことで精一杯であり送っていただいている情報に目を通すことがで

きないでいました。今回ひさしぶりに NEWS を全て読み、大きな変化に驚き、同時に皆様の積極的な活動に敬意を払います。そして、ふと昔のことを思い出して懐かしくなりました。本当はもう一度キャンプに参加したいと思っていたのですが、長

期の休みが取れないので残念です。ずっと応援していますので、ぜひ活動を続けてください。

(塩川悠子)

(塩川さんは 1997年のタイ・ワークキャンプの参加者です)

## 第8回 ラオス・ワークキャンプ

8月29日～9月8日まで第7回ラオス・ワークキャンプをシェンクアーン県で実施しました。ワークキャンプに参加したのは滋賀医科大学の「国際保健医療研究会 Tuk Tuk」の学生7名と全日程の参加者の大学生1名合計8名でした。今年のワークのテーマは“農村における医療事情”として、県や郡病院及び村で調査を行い、他にも当会の農村開発プロジェクト見学、ベトナム

国境訪問、村民の家庭にホームステイ、学校の生徒と交流、障害者のための職業訓練見学、ジャール平原見学等、盛り沢山でした。ここに、国際保健医療研究会 Tuk Tuk の活動趣旨について説明します（以下滋賀医科大学の学生香取さやかさんからの紹介）。また、ワーク参加者の中から関千寿花さんの感想文を紹介します。



村の子供と綱引きをするワーク参加者



農村の医療事情について村民に聞き取り調査

滋賀医科大学「国際保健医療研究会 Tuk Tuk」は、国際保健医療について学ぶ医学生・看護学生のサークルです。メンバーは12名ほどで、立ち上げ後1年ほどの新しい団体です。昨年はアフリカ支援のシミュレーションやHIVに関するワークショップを開いたり、学外の国際保健医療に関するセミナーに参加したりと、活動してきました。部員はカンボジア（4名が20日間のスタディーツアー）、ラオス（1名が20日間の医学調査）、ケニア（2名が1ヶ月半の医学研修）、タイ（2名が20日間の医学調査）などに渡航しております。今年の活動としては、サークル全体でラオスに焦点を当てることが決まっております。先日はJICA ラオスの専門家を大学にお招き

し、小児保健・母子保健に関するシステム作りについての体験型の勉強会を開催しました。今後は授業の合間を利用して、1) ラオス保健システム、2) 農村の生活（農業）、3) 疾病構造（感染症）、4) 政治・経済、5) 歴史と自然史、6) 既存の団体の活動、7) 病院の状況などの内容で、シリーズ化した勉強会を、8月の渡航までに進めていく予定であります。私を含めた4年生は、7月～9月に大学の正規カリキュラムの一貫として、ラオス国立リハビリテーションセンターを通じてビエンチャン近郊の障害児の生活調査をすることが決まっていま

す。これに平行して2週間程度で後輩たちを受け入れ、彼らに机上の勉強だけではない現場の体験をしてもらいたいというのが、今回のスタディーツアーのねらいです。特に、「医療の現場は病院にあるのではなく、農村を中心とした人々の生活の中にある」ということ、「支援者としてだけでなく、支援の受け手（村民）の目からプロジェクトを見る視点をもつ」ということ、二つのメッセージを後輩たちに伝えることができると考えています。（中略）ぜひとも農村訪問を実現し、病気や医療を考える背景を学びたいというのが、サークルメンバー全員の思いであります。

滋賀医科大学4回生 香取さやか



ワークキャンプ参加者



バーシーを体験するワーク参加者

## ～農村生活を体験して医療を考えたとき～

滋賀医科大学 2 回生 関 千寿花

今回はサークル活動の一環として IV-JAPAN のワークキャンプに参加させていただいて本当に満足しています。私たちはラオスの保健事情に焦点を当ててスタディーツアーを企画しましたが、予めから病院や病院に来る患者さんだけを見ていても何もわからないのではないかと、という懸念がありました。そのためには、実際の生活を肌身で感じる事が一番だとも思っていました。今回は農村で 2 泊のホームステイを経験しましたが、それだけでもわかったこと、やはり理解しきれないことが様々ありました。今回の経験は自分たちの立てた仮説“病気や疾患は生活に密着している”ことを理解する手助けになったように思います。理解したことは医療活動の定義などないということでしょうか。農村の人々との交流会では、はっとさせられたことがありました。一番大切なものはなんですか？という問いに“水”と答えたのです。私たちは日本人の一般的価値観であろうと考えた“家族・恋人”と答えました。「家族や恋人、友人は本当に大切だけど、それだけじゃ生きていけないんだよ。」と、あるお

じさんの目が語っていました。私たちは蛇口をひねればきれいな水が出てくる状況に暮らしているから、気づかない。だけど本当に、生き方が、視点が違うと感じました。この国にとって医療とは何を指すのだろうか、そのときふと原点まで思考が飛んだのでした。例えば発展途上国の医療の分野では、きれいな飲料水がないために亡くなっている多くの人々を助けようと必死になっています。彼らもきれいな飲料水があれば生き延びられるかも知れないことを知っていると思います。だけど、そういう理屈でなくて、実際にきれいな飲料水を手に入れられない生活をしていたのです。そこでどのような医療活動を求められているのだろうか。処方としてきれいな飲料水の提供をするなどしかできないのが医療なのかもしれないとも思いました。あるおじいさんが「10 年いたらこの村がわかる。いところだとわかって帰りたくなる。」としきりに私たちに言っていました。あの村で医療活動をしたいのなら、本当に 10 年でも 20 年でも人々と共に一緒に暮らす必要があると感じました。

非常に医療は生活と密着している。私は、すでに根付いてしまっている日本の概念とラオスで感じたギャップを自然と比較していましたが、一人一人違う生活をしている人に、概して医療という一つのものを提供しようとしている事実を知りました。薬だけでは病院にいる間だけでは、到底治療なんか仕切れない。生活の中で治していく、治せなければうまく付き合っていく。そんな医療のあり方を間近に感じたのです。世界中のどこで医療活動をするにしても、その人に見合った医療を提供したいなら、その人が生きている生活環境や生活の仕方に始終注目すべきなのですね。医療は独立してしまっただけから医療の目的を果たせない、矛盾した体系の中に存在するのかもしれない。それは海外における医療だけでなく、最先端の遺伝子治療にも当てはまると思う。私は今後医療活動をしていくのだが、ラオスの生活を通して感じたことがいつかふと思い出せたら嬉しい。何を得たというわけでもないが、今回のホームステイには本当に感謝しています。

### 現在青年海外協力隊員として、活躍中の当会ワークキャンプ OG の鈴木晶子さんの記事を紹介します

「あ... ここに戻ってきたんだ...」それが私がラオスにやってきた第一印象です。私は現在、ラオスの古都ルアンパバーンにある王宮博物館で、青年海外協力隊として、写真撮影技術などを指導しています。1992 年夏。当時中学 2 年生だった私は、タイのワークキャンプに参加させて頂きました。私にとって初の海外。日本という国、社会の大きささえまだ知らなかった私が見た外国「タイ」は、見るものすべて、体験することすべてが驚きとショックの連続でした。「私はなんて守られた小さな中にいたんだろう」と、その時初めて私の中で世界が現実実感に実感を伴うものとして芽生えました。その時の経験を機に、海外に興味を持つようになり、漠然とした思いの中で「将来は青年海外協力隊に参加しよう。」と思い始めました。それから 11 年が経ち、写真の道に進んでいた私にそのあたためてきた思いを現実とする時がやってきました。そして派遣されることとなった国はラオス。「この川の向こうに見えるのはラオスという国なんだよ。」と、あの時誰か

が教えてくれた言葉が記憶の中で鮮明によみがえりました。そして、富永幸子さんとの 11 年ぶりの再会。このつながりを偶然のものとは思いませんでした。ラオスに来てもうすぐ丸 2 年。この国が抱える諸々の問題にも活動上直面し、悪戦苦闘、暗中模索の日々を送ってきましたが、ラオスの豊かな自然、あたたかい人々に囲まれ、日本で社会人生活を送る中では決して得ることはできない本当に貴重な人生勉強をさせて頂いています。私の人生を大きく変えることとなったあのワークキャンプを今、感慨深い気持ちで振り返っています。まもなく協力隊の任期を終え帰国しますが、この経験、学びをまた積み重ねて次への糧としていきたいと思っております。

鈴木晶子  
(1992 年ワークキャンプ参加)



## 第1回ラオス・カンボジアスタディーツアー（5月）参加者の感想文紹介

ラオス、カンボジアではお世話になりました。非常に楽しいかつ面白い旅行でした。特にラオスでの着物ショー、初めての経験、七十を過ぎて生まれて初めて着た紋付袴、それをラオスで着るなど実に貴重な体験、思い出になることでしょう。そのあ

との旅のリラックスは云うに及ばず。貴姉での松茸の味、本当に有難うございました。また、女房の事ではご心配をおかけしました。今はすっかり元気です。ご安心の様。送りました小冊子、自己流、勝手気儘な俳句集です。ご一読下されば幸甚で

す。いつまでもお元気にご活躍されることを祈っております。それではまたお会いすることを楽しみに。平成十七年六月一日。

園田芳生

楽しい楽しいラオス旅行をおえて、無事日本に帰って参りました。色々とお世話になり有難う御座いました。着物ショー、おいしいシェンクアーンの松茸は特に感

動致しました。又、お逢い出来る日を楽しみに致しております。是非又ラオスにお邪魔したいです!!とり急ぎお礼のみ失礼致します。

山田真加柊

夕陽に映へてメコンの流れ悠久に  
微動の歴史を呑んで往くメコン  
メコン河のほとりにて  
松茸を食して語るラオスの夜  
富永氏宅での夕食会にて  
ラオ・日本交流の輪や春の風

園田芳生

《ラオス俳句集》

二〇〇五年五月二十二日  
ラオス日本交流イベントにて

### 《ラオス事務所で早大の授業を》

8月11日に早稲田大学生17名と西村正雄教授、他3名が平山郁夫記念ボランティア記念センター提供科目「東南アジアの開発とNGOの役割」の授業の一環としてラオスを訪れ、当会ラオス事務所を訪問しました。大学院生は職業訓練を見学し、当会の職員がパワーポイントを使って当会の活動紹介をし、富永代表が質疑に応答しました。また、当会の職業訓練の一環として実施しているオンザジョブトレーニングのレストランのカツ丼を試食し、訓練生の腕前に感心していました。

### <サポート会員募集>

奨学金ドナー及び国際協力費・運営費ドナーを随時募集しています。一人でも多くの皆様のご協力を、宜しくお願い致します。

#### ① 奨学金ドナー

年1口 12,000円以上

#### ② 国際協力費又は運営費ドナー

※個人 年1口 3,000円以上

※団体及び法人 年1口 10,000円以上

申込方法：郵便振替にてご送金願います

口座番号：00140-5-537168 加入者名：カノック奨学金

### <編集後記>

両親が8月に2度目のラオスを訪問し、ルアンパラバンを旅行しました。その街の美しさや情緒に大変感激していました。彼らは毎年、隣国のベトナムを旅行していましたが、2年前から私の滞在をきっかけにラオスを訪れるようになりました。静かに、また力強く流れるメコン河と彼方に沈む夕日を眺めながら美味しいラオビールを飲み、ゆったりと流れる時を過ごすことが出来るラオスに感動しておりました。また、来年の楽しみがひとつでき、日本での仕事に励みができたと喜んでいました。私も3年続けてベトナムを旅行しましたが、急速に観光地化された反動で何か大切なものが失われていく気がします。ジレンマを感じる今日この頃です。

(松島準之介)

## 【特定非営利活動法人 国際協力NGO・IV-JAPAN】

日本事務所

〒331-0058 埼玉県さいたま市西区飯田426

TEL:048-622-8612 / FAX:048-625-0271

E-mail: [iv-japan@cc.rim.or.jp](mailto:iv-japan@cc.rim.or.jp)

<http://www.cc.rim.or.jp/~iv-japan/>

ラオス事務所

P. O. BOX 7920 VIENTIANE, LAO P. D. R.

TEL/FAX: +856-21-26-1240

E-mail: [ivjapan@laotel.com](mailto:ivjapan@laotel.com)